

う。その結果、学校から追放され、アメリカのテキサスへと旅立ったのだった。これを読み終えた時、「こんな残酷なことであるものか」と大きな怒りがこみ上げてきた。又、そんな社会の中

にいると間違いいにも気付かず、それが当然の事のように思えてくる人間の心の弱さを痛感させられた。そして、人は皆、

何よりも自分が一番かわいく、大事に思う。自分が満足すれば、それで良いという利己主義な考えを誰もがもつ。その為、相手をどんなに傷つけ、

それによって相手がどんなに苦しみ、悲しんでいるかという

立場にも気付かず、相手の立場に立って考えることも全くしようとしな

い。原因だとこの本を読んで強く思った。

私自身も反省してみると、小さい時から今までにたくさんの小さい差別をしてきたように思う。あの人は足がのろいから一諸のチームに入れま

いと、頭が悪いから同じ班には入れまいとか、小さな差別で相手を大きく傷つけてきた。又、周囲の人に誘われる

時でも否定しないで、ずるずると自分の都合のいい甘い汁

の中につかってしまっている。私とその人のようにされたら、どんなに寂しく、悲しかったらどうか。今考えると、自分のみにくい心が大変恥ずかしく思える。

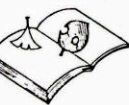
相手の身に成り変わるという事は、絶対に不可能なことだ。しかし、相手の立場に立って考え、それを実行する

という事は、必ずできるはずだ。憲法等で決めることもとても大切だと思

うが、一人の心からみにくい差別意識をなくすることは、同和問題を解決するためにも大変重要なことなのだ。

破戒

深川中学校 三年



— ああ、こんな本読むんじゃないかった。 —

悲しい過去の物語『破戒』

は私の心に大きな間を投げかけてきた。こんな悲しい昔は、知らないほうがよかった。正直を言う私のこの本の初めの感想はこうだった。

瀬川丑松、昔えたで、親がそれを隠し続け今に至る小学校教師である。彼の戒めとは、父から教えられた『故郷を隠せ』ということであった。故郷を隠す事は、自分がえたである事を隠す事。ということ

は、えたを恥じている事だ。これなら身分解決の意味は無く新平民とは名ばかりである。同じ人間でありながら何故、故郷を隠し、過去にこだわるのか？ 流れる血は赤く誰もが幸福を願い、人として生まれ

てきたのに、どうして！ 誰もかも自分を作ったのは人間、苦しむのも人間なのに。当時の社会の状況からやむを得なかったと言って済むのだろうか。

丑松は自分がえたであった為に、幾度も自分を恥じ、人々を恐れておびえていた。大日向は、道理もなく非人

村田 尚子

扱ひされ、病院からも、下宿からも追い出された。仲間が辛い目にあっているのを見て

丑松は何を思ったのだろうか。彼らは外見は全くえたでは無い。もちろん心も、偏見から罪もないのに傷つけられた被害者だ。

学校で人気のあった瀬川先生(丑松)はえたらしいという噂で人々に干渉され、苦し

い日々を送った。父も死に、複雑な心境だったろう。その末、彼は死を覚悟した。私なら迷わず死んだらう。えたと知れば、これから先、生きていても死んだようなものだ。しかし丑松は生きた。先輩に心を打ち明けようと決心したのだった。

けれども、現実

は厳しく、うまくいかない。猪子先生は殺されてしまった。

破戒、丑松は、先輩の死によってやっ

と決意した。先輩はえたでありながらも、自分を、世間にさらし出し、「我

はえたなり、我はえたを恥とせず」と

壮烈な生涯を閉じた。その生涯から、初めて人生について考えたのだろうか。故郷を隠し、心を隠し、自分の性

格までも消極的にしていた愚かな自分。先輩の死に直面し、あの生きざまの偉大さに感動したに違いない。だから彼は無心になり、えたであると告白しよう

と決心したのである。

「あわれな姿で床に額をつけ、跪いて生徒に詫びた彼。なんと無態な姿だったろう。私に言わせれば不十分な告白に思えてならない。改めて身分について考えさせられた。

丑松の破戒は、先輩の世界でなく、お志保の心の世界だったと思う。堂々と完璧なものではなかった。人間くさい告白だった。

丑松の破戒もむなしく、社会は冷淡だった。天は人の上に人を造らず：とよく言えたものだ。破戒の結果はテキサス逃避行となった。彼は社会を捨て外国へ行った。頭の中に霧がかかったようにな

った。何か物足りない。丑松は自らの破戒に満足しただろうか。人々は告白をどう受けとめたか。大日向の二の舞になったか、慎重に受けとめたのだろうか。

丑松は自我の破戒後、身分差別という社会の戒めを破って

くられると私は思っていた。がそれもなかった。丑松にとっ

て破戒とは何だったのか。お志保である—破戒により二

人は、士族とえたにもかかわ

らず、ためらいもなく結婚を誓った。丑松の破戒なくしては二人は結ばれなかったはずだ。

「えた」この名詞は日常口にしない。平和な日々が続くにつれ、歴史上の出来事として済む日が来るだろう。現在の私達の幸福は過去があつて成り立っている。この幸福も先人たちが苦しみ、社会をよ

りよくしようと思

う。その先人たちの永遠のテーマは、人類の繁栄と平等、そして永久の平和だったはずだと私は思う。

そのテーマは達成できたか？ 表面的にはできたかもしれ

ない。しかし、私自身はどう

だろう。同じ組のAさんに話

かけるのに何もためらいを感

じなかったか、嫌なことをする

時ためらいもせず笑顔でできたか、バスの席を譲るのに何

もためらわず譲れたか。自信を持って言える所はない。先人達の努力も私達が壊してはいけない。小さな事も解決して、小さな差別も厳しく見

つめることが大切だ。永遠のテーマを追求し、子孫から子孫へとリレーするものが必要だと思う。猪子先生から、丑松へとそのように。身分差別はなくなっ

